



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	環境構成：一人ひとりを生かす環境構成のあり方とは？
Author(s)	渡辺, 純子; 彦坂, 秀樹; 井口, 眞美; 根本, 裕巳
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学教育学部附属竹早小学校・幼稚園, 19: 9-18
Issue Date	2003-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/6034">http://hdl.handle.net/2309/6034</a>
Publisher	
Rights	

## 第1分科会

### 環境構成

#### 一人ひとりを生かす環境構成のあり方とは？

渡辺 純子  
井口 眞美

彦坂 秀樹  
根本 裕巳

## 1 研究テーマについて

### (1)本校園の幼小連携について

本校園においては、

- ①活動上の連携（子ども同士の交流活動）
- ②内容上の連携（教育観の共通理解、カリキュラムの共有）
- ③組織上の連携（分掌の共有、人事交流）

等、永く幼稚園と小学校が実質的な連携をはかってきた。

園児と小学生との交流活動を行い、活動上の連携をはかることは当然であるが、更に、幼稚園と小学校が共同で研究を進めることによって、幼小8ヶ年を通して一貫した教育観をもって子どもを育ててきた（内容上の連携）。研究保育の場では、小学校の教官が参観し、積極的に意見交換を行う等、単に形式的な連携ではなく、実質的な連携がはかれるよう心がけている。

昨年度からは、幼稚園担任と1年生担任とで分科会を構成し、「環境構成」について考えることで教育観の共通理解を深めてきた。本年度は、その検証の方法として、1年間にわたり抽出児を追跡することにした。

とかく幼小連携研究においては、交流活動を行うことのみで留まってしまうか、幼小共有カリキュラムを作成することに力点が置かれるかのいずれかである。しかし、幼小が教育観の共通理解をはかることなしに幼小共有カリキュラムを作成したとしても、それは机上の空論となってしまうだろう。子ども一人ひとりの姿を記録し、見つめ直し、子どもの思いに添った指導のあり方を考え、具体的・実践的な場面を踏まえて教育観を共通にしていくことが、地道ではあるが重要であると考えている。

### (2)研究テーマに関して ～「環境構成」を取り上げた理由

全体テーマに即して「教師の関わり」について考えていくにあたり、第1分科会では、「環境構成」をキーワードとした。

本校園では、園児と1年生は発達的に類似性をもつとの前提に立っており、教師の関わり方についても、幼稚園と1年生とで共通性をもつべきであると考えている。幼稚園・1年生にとっては、

- ・教師の意図を込めて具体的な事物（物的な環境）を提示することが重要である
- ・教師のあり方（言葉のかけ方、物的環境の提示のタイミング、かもし出す雰囲気等）が、物的な環境や仲間等と並立する重要な環境の一つである

といった意味からも、「教師の関わり」をとらえる上で「環境構成」に重点を置くことが大切であると考えた。

幼稚園と小学校の現場においては、「環境」という用語のもつニュアンスが大きく異なる。また、小学校の担任教師は6学年を持ち回っているため、中堅の教師でも1年生担任の経験が少ない場合もある。幼稚園と小学校とが、具体的・実践的なレベルで共通の教育観をもつためには、諸々の用語を共通理解するところから研究を始める必要があった。

本校園では、

▲「環境」＝事物、仲間、教師など、子どもを取り巻く様々な要素

▲よりよい「環境構成」＝子どもが興味・関心に即して主体的な活動を行う中で、「子どもにとって意味のある」体験を重ねていけるような状況を作り出すこと

と定義し、共通理解した上で、各クラスの実践を通してよりよい環境構成について考えてきた。

## 2 研究の方法

### (1) 研究の進め方

環境構成が適切であったかどうかを検証する方法として、本年度は、各クラスごとに抽出児の記録をとって研究を進めることにした。

具体的には、「主体的に取り組む」という視点から各クラスごとに抽出児（3～5名）を決め、年間にわたってその変容を追ってきた。校内研究会等の場でも、抽出児について討議し合い、その見とりを通して環境構成が適切であったかを評価してきた。

### (2) 抽出児記録の観点

抽出児をとって研究を進める理由としては、

- ・抽出児の細かな記録を通して、クラス全体の実態やニーズを推測し、把握するため。
- ・抽出児の変容を評価することで、環境構成が適切であったかを考えるため。
- ・（とりわけ自己表現力がまだ拙い幼1年の子どもにとっては）教師が子どもの思いを的確に読みとる教師の力量が求められる。抽出児の記録の取り方を考えていくことで、より多面的な見とりの視点をもてるようにするため。

等が挙げられるだろう。

3～5名の抽出児の記録にあたっては、次の3つのプロセスをふまえて見とってきた。ここでは、研究の全体テーマに基づき、代表的な活動における抽出児の姿を「教師の関わり」と絡めて記録していく。

#### ① どんな環境構成をしたか <活動の動機>

↓ 抽出児の実態やクラス全体の反応を見て、どのような環境を設定したか。

（教師の願いや意図の具現化、活動内容・方法の決定 等）

#### ② 子どもがどう環境を利用したか、環境を変化させていったか <活動の経過>

↓ どのような支援・援助をしたか。どのように活動を修正（環境の再構成）したか。

#### ③ 子どもの姿はどうであったか、どう変容したか <活動の結果>

↓ その活動における「子どもにとっての意味」は何か。

その子の課題は何か、次に求められる環境構成とは。

### (3) 記録の実際

1年間にわたる活動の評価，経営案の見直しは，日々の実践と切り離されたものであってはならないであろう。そこで第1分科会では，日々の実践の中で見とれた一人ひとりの育ちをとらえる観点を設定して記録をとり，学期末，年度末の評価，学級経営案や指導計画（幼）を見直していきたいと考えた。

本年度は，日々の記録を丁寧に蓄積していくことにした。現在のところ，記録の観点を共通にした上で，具体的な書式については各担任の使いやすい形態で行うことにしている。

①抽出児一人ひとりの育ちをとらえ，日々の記録をとる。

日々の活動の様子，友達や教師との関わり，生活習慣等，気づいたことについて，自由に記述していく。

②日々の記録を（期，学期ごとに）視点に基づいて，抽出児の解釈を行う。

下記のような視点に基づいて，①でとった記録から，抽出児の解釈をまとめる。

- ・個の特性（興味の対象，課題のもち方，活動への取り組み，表現方法等）
- ・集団との関わり（仲間と，クラス集団の中で）

その際，どんな教師の関わりが子どもの主体的な学びを支えたのかを代表的な活動事例を通して分析するため，「抽出児の活動の取り組み」「見とり（解釈）」「環境構成（支援・援助，物的環境の設定）」について，明確に区別して記述するよう心掛けた。

例1) 5歳児つきぐみ 抽出児A男：Ⅶ期（5月中旬～）の姿

子どもの姿（事実）	解 釈	環 境 構 成
・砂場でご馳走作りが多かったが，6月中旬頃より，仲良しのB男，C男，D男たちと初めてペンギン山の縁に沿って砂掘りを始め，数日続いた。	・ごっこ遊びを楽しむ中で砂の感触を楽しむことから，全身を使って遊ぶことに楽しさを感じ始めてきた。	・ダイナミックに掘る楽しさが味わえるように大きい砂場に誘う。 ・十分に遊んだ後，埋めるようにさせる。

例2) 1年1組 抽出児A女の姿

子どもの姿 （事実）	給食終了後，A女が自分の机のまわりのゴミを片づけていた。それまで，紙を切っても片づけをあまりしなかった経緯があるので，その行為自体をクラスでほめた。その後，同じように自分達の机のまわりを片づけたり，給食当番の机を雑巾がけしたりする児童が増えてきた。それを見て，A女に，「あなたがやってくれたことがみんなにも伝わった。」と話をした。
解釈	A女は自分の行いが友達によい面で影響することを知ったのだと思う。
環境構成	A女のよい面が認められたときに，全体にそのよさを呼びかけることで，クラス全体にとってもA女のよい面が伝わるだけでなく，A女にとってもクラスによい影響を与えることができたという気持ちをもたせることができる。このことが，A女の他の面でもよい影響を与えた。

③学級としての集団の育ちをとらえる。

抽出児の見とりも手がかりとして，集団としての育ちをふり返る。それを受けて，活動の内容，方法について，次の環境構成（支援・援助，物的環境の設定）を考えていく。

ここでは、子どもの日記やクラスの様子から立ち上げた「秋見つけ工作」という活動において、抽出児を中心とした“子どもたちの姿”から環境構成を変化させていった例を、2週間分の週案から拾い出してみた。

例 3  
1年2組週案

平成14年度 1年2組 週案 (11月18日~11月22日) 担任 藤原 秀樹

＜4月からの主な活動履歴＞  
 クラスの問題を追究する活動  
 (子どもたちから提案した活動)  
 ・野球を育ててみよう。→ 学校探検  
 ・キッズフリスティックを成功させよう  
 ・幼稚園をよんでおみせやさんごっこを閉こう  
 ・おたけ屋敷→のりのしすく〜 (竹早祭)

＜今日の時間割を振り返るにあたって＞  
 今日の時間割を振り返るにあたって  
 12日に小石川運動場に行き、夢に行った時との違いに目を付けて学「段らぎに書いている子もいた。そこで、字数でも「数をみつけて何かできないかな」と問いかけたところ、「毎てや木の手を塗って工作したい」という声が出た。  
 ・幼稚園に物を見せたいという活動があったが、竹早祭の前にはまだ遊んでいた「大きなカブ」の顔を見せよう、ということになった。1時間とつたが、近く、2時間続きがほしいという要望があり、21日に2時間続きとした。  
 ・「かすのじかん」3時間は、先生からの提案。なるべく朝の早い内にやりたいという要望があり、2時間目に入れる。

＜環境の構成＞  
 クラスの問題を追究する活動  
 (教師から提案した活動)  
 ・いくつといくつ から、足し算、引き算に移行する。今度は特に、タイルを使って、繰り上がりの足し算に取り組む。  
 ・「せんせいのじかん」は、初めての漢字を行う。象形文字からの導入。身近な曜日、数字の練習を行う。  
 ・「ボール取りゲーム」は、今持っている力で楽しむ段階。ルールをしっかり把握すること。勝敗を正しく認めることを、まず大切にしてほしい。  
 ・引を添え、ドリキネキラ物語の読み聞かせ

(子どもたちから提案した活動)  
 ・幼稚園に物を見せたい「竹早祭前の大きなカブの顔が終わっていない」という状況から、幼稚園に大きなカブの顔を見せる方向性が選んだ。また、教師の方から、幼稚園にだけだけでなく、お家の人達(保護者)にも見せることもできると、子ども、「みせたい」という声が多く聞かれた。  
 ・当初は、活動をしながら会話を工夫しようと考えたが、なかなか教科書の文から取用できなかった。そこで、子どもたちが自分で考えた絵や言葉を使って表現してほしいという声が出た。  
 ・「秋みつけ工作」は、学校に落ちている落ち葉や実などを利用して、自由に造形遊びができるようにしたい。紙に貼って作品にするだけでなく、立体的なものでも発想を自由に作らせてほしい。造形だけでなく、絵や言葉も使ってほしい。使いすぎて、落ち葉等の材料のよみがなくならない程度にできるように声をかけていきたい。

＜園の興味関心を追究する活動＞  
 (教師から提案した活動)  
 ・「あいうえお」(や)「あ」「い」、表音「お」「え」「い」、「」をつけて変身  
 (子どもたちから提案した活動)  
 ・竹早祭での活動に満足感を覚え、新たな目標を達成するための話し合いをした。  
 ・5月のはじめに予定していたことを話し合い、ほとんど実行できたが、「6年生を学校探検に招待する」ことが実行できておらず、話し合いの話題にのぼった。その中で、「6年生は学校のことを知っているから、探検ではなく、卒業する前にお別れパーティーをしたらどうか」という案が出された。  
 ・幼稚園生を幼稚園生に招待する活動は、満足を得られたものであったが、幼稚園生と一緒に活動をしたと思う子が多く、どんな活動ができそうか話し合った。現時点では、一緒に「おたけ屋敷」を遊んであげたい。→ 森作り を教えてあげたい。→ ジャンダルムゲームなど一緒に遊ばせたい。→ 歌や英語を「聞かせたい」→ 帽子とり ゲームなど「遊ばせたい」という声が出ている。

平成14年度 1年2組 週案 (11月25・26日 12月2日 12月6日) 担任 藤原 秀樹

＜4月からの主な活動履歴＞  
 クラスの問題を追究する活動  
 (子どもたちから提案した活動)  
 ・野球を育ててみよう。→ 学校探検  
 ・キッズフリスティックを成功させよう  
 ・幼稚園をよんでおみせやさんごっこを閉こう  
 ・おたけ屋敷→のりのしすく〜 (竹早祭)

＜今日の時間割を振り返るにあたって＞  
 27日(水)から、家庭学習のため、2週間分の予定をたてた。幼稚園生に誘われる「おたけ屋敷」の日は、12月5日に決まっていたことも、子どもたちに早めに知らせ、見直しを持たせたいと思っていた。  
 ・計画を立てるときも、表示にまず、5日の園外学習から考え、初日をリハーサル、そして練習の日、2日にも参加する予定であった。2週間分の予定も決まっていた。そして、今度は、行き先も「大きなカブの顔」の練習を予定することになった。  
 ・園の発表前日は、まず、リハーサルが大事なので、「みんなにいいたいこと」「せんせいのじかん」の練習も進めたい。

＜環境の構成＞  
 クラスの問題を追究する活動  
 (教師から提案した活動)  
 ・「せんせいのじかん」は、毎日使う文字を提示する。  
 ・「ボール取りゲーム」では、子どもたちのボールの工夫から「ボールの数を増やして」取り組む。ボールの大きさの違いは、得意の違いに目を付けて学「段らぎに書いている」。「数の時間」では、引き算を「くり上がりのある足し算」を行う。計算ゲームを行う。  
 (子どもたちから提案した活動)  
 ・「大きなカブの顔」練習では、2時間続きが基本になる。家庭学習前日に簡単にできる作り物を準備する予定。  
 ・「秋みつけ工作」では、竹藪、爪楊枝、旗標刺等を用いる。また、キラキラと輝くドリルを準備して行うこととする。  
 ・朝の時間、グループ別に発表場所がわかれたため、他のグループの様子を見ることができない。そこで、リハーサルをクラス内の発表の場と位置づけ、お家の人も呼びたい、という声が出た。子どもたちも練習してもらおうとする。

＜園の興味関心を追究する活動＞  
 (教師から提案した活動)  
 ・「あいうえお」(や)「あ」「い」、表音「お」「え」「い」、「」をつけて変身  
 (子どもたちから提案した活動)  
 ・竹早祭での活動に満足感を覚え、新たな目標を達成するための話し合いをした。  
 ・5月のはじめに予定していたことを話し合い、ほとんど実行できたが、「6年生を学校探検に招待する」ことが実行できておらず、話し合いの話題にのぼった。その中で、「6年生は学校のことを知っているから、探検ではなく、卒業する前にお別れパーティーをしたらどうか」という案が出された。  
 ・幼稚園生を幼稚園生に招待する活動は、満足を得られたものであったが、幼稚園生と一緒に活動をしたと思う子が多く、どんな活動ができそうか話し合った。現時点では、一緒に「おたけ屋敷」を遊んであげたい。→ 森作り を教えてあげたい。→ ジャンダルムゲームなど一緒に遊ばせたい。→ 歌や英語を「聞かせたい」→ 帽子とり ゲームなど「遊ばせたい」という声が出ている。

＜12月の予定＞  
 12月 11月  
 月2日 5日 14日 16日 17日 20日 26日 27日 28日  
 1  
 2  
 3  
 4

＜今後の美しい時間の履歴＞ 11月20日、11月22日実施 (18日は、工作が延びて中止)

1日: 園外-377	11日: 園外-628	21日: 園外-628	31日: 園外-628
2日: 園外-377	12日: 園外-628	22日: 園外-628	32日: 園外-628
3日: 園外-628	13日: 園外-377	23日: 園外-628	33日: 園外-628
4日: 園外-377	14日: 園外-628	24日: 園外-628	34日: 園外-628
5日: 園外-377	15日: 園外-628	25日: 園外-628	35日: 園外-628
6日: 園外-628	16日: 園外-377	26日: 園外-628	36日: 園外-628
7日: 園外-628	17日: 園外-377	27日: 園外-628	37日: 園外-628
8日: 園外-628	18日: 園外-377	28日: 園外-628	38日: 園外-628
9日: 園外-628	19日: 園外-377	29日: 園外-628	39日: 園外-628
10日: 園外-628	20日: 園外-377	30日: 園外-628	40日: 園外-628

④学期末の評価、反省

子どもたちの姿を継続して見ていくことで、その子の特性や発達の様子がとらえられる。また、継続的な視点で活動の評価をすることによって、その子の変容やその背景をとらえ、見通しをもって活動を進めていくことができる。そこで、③で行った活動のふり返りをもとに、学級経営案の修正をすることにした。

(→「学級経営案」を参照のこと)

### 3 幼小の交流活動について ～園児と1年生との交流活動の実践

本校園では、幼小連携研究の一環として、1年生と園児との交流活動を恒常的に行ってきた。

毎年、定例的に位置づけている交流活動は、「キッズフェスティバル（1・2年生と園児とで行う運動会的な行事）」や「竹早祭（学芸会、音楽会、展覧会を兼ね合わせた趣旨をもつ各クラスの発表会）」に参加することだけである。その他、一緒に交流することを計画づけられている活動はない。子どもたちとの話し合いで幼小の交流活動が生まれてきた場合に、交流活動をつくり上げていくことになる。

私たちは、異年齢同士の交流活動を「子どもにとって意味のある」貴重な活動であると捉えている。実際、幼稚園では、4、5歳児の異年齢の関わりを大切にしているし、小学校でも、縦割り集団による活動を年間を通して計画している。園児にとっては、身近なお兄さん、お姉さんの存在が格好の遊びのモデルとなる。また、1年生にとっては、年下の子を思いやって行動する絶好の機会となるのである。こういった交流活動の価値をふまえ、教師側からも、交流の場を積極的に設ける場合もある。

園児が園生活にも慣れた2学期より、4歳児はなぐみと1年1組、5歳児つきぐみと1年2組それぞれの交流活動をスタートさせた。より自然な形で園児と1年生が楽しく関われるようにと、できるだけ継続的に交流の場をもつように心がけている。更に本年度は、小学生のみがリードをとって交流を進めるだけでなく、園児も受け身でない形で交流を進めていきたいと考えた。その経過は以下の通りである。

#### (1) 4歳児はなぐみと1年1組との交流

##### ①小石川植物園で一緒に遊ぶ 10月4日（月）11:30～13:00

幼稚園では、毎週金曜日に近くの小石川植物園に園外保育に行く。この日は、4歳児、5歳児、1年1組、1年2組が植物園に行き交流を行った。

初めての交流活動であったため、園児と1年生はそれぞれ別の場所で過ごした後、11:30に対面をしてから近くでお弁当を食べた。お弁当を食べ終わった子から、すぐそばで遊ぶことにした。ここでは、保育者と一緒に1年生とかくれんぼをしたり、はないちもんめをしたりする姿も見られた。

1年生との交流は、4歳児にとって楽しみでもある反面、不安も感じるものである。その意味で、1回目のこの日は、一緒ではなく近くでお弁当を食べたこと、食後に一緒に遊んでもよいし別々に遊んでもよいとしたこと等、無理ない環境となったようだ。

##### ②自分のペアを知り、クラスごとに障害物かけっこをするの見合う

10月15日（月）11:00～11:30

1年1組の子どもたちが、「自己紹介カード」を作って幼稚園に来た。カードの表にはペアの園児名、裏には自分の名前が書いてあり、きれいな絵で飾ってあった。1年生は、カードを園児に渡した後、園児が障害物かけっこに取り組む様子を見て、一生懸命走る姿に声援を送っていた。その後、1年生も障害物かけっこに挑戦した。

園児は、渡されたカードを大切に持ち帰り、家庭でも、保護者に自分のペアの1年生について話していたという。

担任のリードのもと、障害物かけっこを互いに見合うという環境を設定したことは、とりわけ4歳児にとっては、無理のなく楽しめる交流の場となったと考えられる。

③小石川植物園に行く→雨天のため中止 10月18日(金)

2回目の植物園であるため、現地で出会い、一緒に過ごす計画を立てていた。4歳児と1年1組は、ペア同士で手をつなぎドングリ拾いをし、ペアごとにお弁当を食べる予定になっていた。雨天のため植物園は中止となり、校舎内でお弁当のみ一緒に食べることも考えたが、時間の調整がつかず行わなかった。

## (2) 5歳児つきぐみと1年2組との交流

①ペアの相手を知り、ゲームで遊ぶ 9月26日(木) 11:00～11:30

1年生が幼稚園遊戯室に来て、ペアごとに自己紹介をし合った。また、1年担任のリードのもと、「あっち向いてホイ」等のゲームを行った。

1回目の交流活動であり、園児にとっても、また、竹早園舎出身でない1年生にとっても、無理のない交流となった。互いのペアを知り、親しみをもつ機会としては、適切な場の設定であったと考えられる。

②小石川植物園で一緒に遊ぶ 10月4日(月) 11:30～13:00

4歳児も一緒に交流活動であり、園児約70名、1年生約80名という大人数でもあったため、(先述の通り)園児と1年生は、それぞれ別の場所で過ごした後、11:30に対面をしてから、近くでお弁当を食べた。お弁当を食べ終わった子から、側で遊ぶことにした。かけっこ、かくれんぼ、かごめかごめ等、1年生担任や幼稚園教師を仲介として、1年生と園児が一緒に遊ぶ姿が至る所で見られた。

積極的に異年齢の関わりをもとうとする子、引っ込み思案な子等、各自の実態に即した無理のない環境であったと考えられる。

③5歳児が1年生のお店やさんごっこに行く 10月17日(木)

1年2組で準備を進めていたお店やさんが開店したため、5歳児が1年2組の教室に行き、お店やさんごっこのお客さんとして楽しんだ。

折り紙のしゅりけん等、親しみやすい商品が並び、5歳児は、やさしく教えてもらう、おまけのおみやげをもらう等、買い物を大変楽しんで、「今度は幼稚園に来てもらいたい」という声も聞かれ、互いを親しみのある身近な存在として受け止められたと思われる。

④小石川植物園に行く(2回目)→雨天のため中止 10月18日(金)

2回目の植物園であるため、現地で出会い一緒に過ごす計画を立てていた。5歳児と1年2組は、一緒に自由に遊んだ後、お弁当を食べ、園舎まで一緒に歩いて帰ってくる予定であった。しかし、雨天のため、小学校体育館でお弁当をペアの1年生に誘われて一緒に食べた。食後は、はないちもんめ、ハンカチおとし、だるまさんがころんだ等の遊びを1年生にリードされながら一緒に遊んだ。

⑤劇を見る 12月5日(金)

ペアの1年生のグループの音読劇を見る。5つのグループを幼稚園保育室、遊戯室、1年生教室の3カ所に分けて見ることにした。

この後も、園児と1年生との交流を積極的に進めてきた。教師が設定した環境で楽しむことから始め、徐々に、それぞれが好きな遊びにより主体的に取り組めるような環境構成を目指していった。

(詳細は、5歳児つきぐみと1年2組の実践事例「いっしょにあそぼう」を参照のこと)

#### 4 分科会当日の質疑を受けて

当日の分科会の内容は、以下の通りである。

①分科会提案（提案；井口）

②研究協議（司会；根本 提案活動自評；渡辺，彦坂）

③研究協力者から（研究協力者；山梨大学教育人間科学部助教授 中村 亨史先生）

分科会では、幼稚園，小学校教諭らが一緒になって、具体的な提案授業の場面を踏まえて幼小の交流活動のあり方について考える機会をもつことができた。当日は、協議の観点として

- ・研究提案について
- ・提案授業について
- ・幼小連携について

の3点を取り上げることにした。ここでは、参観者から挙げられた質問内容に触れながら、この3つの観点にそって協議会を振り返ってみる。

##### (1)研究提案について

①環境構成とは、どんなことを要素と考えているか？

→人的なものとしては、園児，小学生，中学生，教師をはじめとする教職員，保護者等  
物的なものとしては、a)園舎・校舎，園庭等の施設や自然物等半固定的な環境，b)机，材料ワゴン等，保育室や教室に設置された備品，c)遊具，教具，教材，素材等，活動に必要な物品，d)掲示物，作品等，活動の刺激となるもの 等々を要素して考えている。

②抽出児はどのように設定されているのか？

抽出児を決定する時の参考資料，データについて。（教師の見とり，診断テストなど）

→それぞれの担任の見とりから決定しており，診断テストなど外部的なデータ資料はとっていない。1年生担任は，子どもが主体的に取り組む様子を，「集団の中での姿」「個で取り組む姿」の2次元からとらえることにし，その姿が特徴的な子を抽出児として選んだ。幼稚園では，主体的に取り組む姿が，担任からみて見とりにくいと考えられる子を抽出児として選んでいる。

③記録用のカード類の工夫は？ねらいに即して評価はどのように工夫しているのか？

→小学校では座席表形式，名簿順の一覧表に記録をしている。記録の観点は共通にしているが，所定の形式はなく各担任の裁量に任されている。また，小学校においては，子どもの自己評価を大切にしている。日記，ノート等の記録によって子どもの自己評価を読みとり，担任の重要な評価の材料の一つとしている。

幼稚園では，子どもの実態から導き出されたねらいに基づき，環境を構成し評価を行っている。加えて，学期末，年度末には，園の指導計画に即しての評価も行っている。とはいえ，細分化されたチェックリストのような項目はなく，子どもの総体的な姿，伸びた点について記述していくように心がけている。

④抽出児研究を進めたことでの成果は？

→1年間継続して抽出児を見とっていったことで，一人の変容の様子を丁寧に見続けることができた。また，研究授業，研究保育等を通して，他の教員が見とったものを交換し合える機会をもち，解釈をより適切なものにすることができた。



## (2) 提案授業について

- ① (双六の場面で、前回作ったサイコロを紛失してしまった子どもたちに対し、渡辺Tが紙でサイコロを作ることを提案した。その後に関わった彦坂Tは、鉛筆で作ったサイコロを提示してすぐ遊び出せるように促していた。)

2人の教師のねらいの違いによって、子どもが戸惑ってしまうのではないか？そういったズレの修正の仕方は？

→鉛筆のサイコロを提示した後で、作りかけのサイコロがあったことに気づき反省した。本日のねらいのすりあわせについては反省すべきであると思う。ズレについては、話し合う中で修正していく。(彦坂)

厚紙等の材料を用意していなかったため、サイコロを作ることに時間がかかってしまった。遊びたい気持ちを尊重すべきだったかと反省している。(渡辺)

両者のズレが、幼稚園と小学校という立場でのズレなのか、見とりのズレなのかをはっきりさせる必要があるだろう。こういったことを、具体的な子どもの姿を通して話せることに竹早のよさがあると思う。(井口)

場面、状況、時間で解釈は違ってよい。渡辺Tに関わったのは、活動が始まってすぐであり、時間がたっぷりあるため、作りたい思いを尊重した。彦坂Tに関わったのは、店番を交代する2分前で、この時点で作っては遊べないことを判断して、すぐに遊べる援助を行った。後でお互いに情報交換をすることに重要な意味がある。どういう事実があって、その事実をもとにどういう過程があったのか、それらをまとめて解釈する必要がある。

(中村T)

- ②本時をリハーサルとしているが、本番との違いは？

また、1年生が交代で店番をし、園児が自由であったことについて。

→幼稚園にとっては、毎日が本番であると考えている。1年2組は、竹早祭のおぼけやしきでリハーサルの経験がある。練習があるからこそ、本番の時に、よりよくするために修正していくことができる。

また、おぼけやしきの際に、店番(おぼけになる、こわい話をする)をする子と遊びに行く子に分かれた経験もある。今回も、店番も楽しみたいという思いが子どもの中にあった。(彦坂)

小学生の方が、これまでの経験を積み重ねていく力がある。幼児でも、リハーサルの意味を知らないことはないが、この活動では、その時その時を楽しむことを一番大切にしている。(渡辺)

## (3) 幼小連携について

- ①交流活動のよさ、問題点について

竹早園舎出身以外の1年生の願いとして、他園との交流はあるのか？現在の交流で、どの程度満足しているのか？

他の場(学童、児童館など)での異年齢活動と比べ、学校だからこそできる異年齢活動のよさは何か？

→定期的に行っている交流活動として、「行事への参加」がある。幼、1・2年生が合同で行う、6月の「キッズフェスティバル」、11月の幼小「竹早祭」が毎年行われている。そ

の他、2～3月の5年生が年長児を校舎案内する「学校探険」がある。それ以外に、学習の発表の場として、ペープサートを使った読み聞かせをしに幼稚園に来る等の活動がある場合もある。

交流活動を行うことで、互いの子どもの姿を目にし指導をすることで、幼小互いの教育方法の違い、よさ等を学ぶことができる。また、幼稚園側からすると、幼児期だけに限定して教育を考えがちだが、子どもの将来の姿を具体的に想定しながら保育を考えられるようになる。小学校側からすると、就学前の子どもの姿をみることで、1年生の指導のあり方を見直すきっかけができるかと思う。

特に、竹早地区の場合、幼小の教員が、共通の教育観をもって交流活動を計画実践するよさがあると考えられる。また、子どももほとんど全員が連絡進学により竹早小学校に進学するため、小学校教員にとっても、子どもの様子を知ったり、就学前の様子（幼稚園生活）を知ったりする場となるだろう。

## ②幼小連携のメリット、デメリットについて

→メリットとしては、教育目標の共通化、共通の形式の学級経営案作成等により、幼小共通した教育観をもって教育を行うことができるメリットがある。また、個々の子どもの姿を伝え合い、一人ひとりにとってよりよい指導のあり方を考えることもできる。

また、幼稚園と小学校で使用している言葉の共通理解は難しい面があるが、それを実際の子どもの姿や活動場面から理解しあうことができた。

デメリットとしては、幼小会議等、時間的な制約が増えることは否めない。しかし、公務分掌の共有等、組織的な連携を図ることで、簡略化できる部分は簡略化し時間を節約する方法は考えられるであろう。

## ③幼小の連携にあたって、日常的にどの程度、先生同士での打ち合わせ等がなされているのか？ また、幼小共同研究について、研究会のシステム（幼小の教諭が話し合う会や時間の設定）はどのようなものか？

→本校園では、研究等の分掌での連携もあるので、校内研究会や大きな行事、その他、日常的に幼小の教員で打ち合わせを行う機会が頻繁にある。また、幼小共同研究について、今年度は第1分科会は、幼（4歳児、5歳児）・1年生の教員で構成されている。研究会では第1分科会として提案や活動研究（幼稚園1回、小学校1回）を行った。公開研究会でも幼小連携で活動提案を行った。その他に、幼・小・中の連携を図るため、中学校を含め、交流会を開いている。

## ④幼小連携（子ども同士の交流を設定する）を行うことで、幼稚園、小学校で見えてきたものは何か。例えば、ねらいの修正、新たな活動の設定や時期、学習や保育のスタイル等

→小学校としては、個人の活動の見とりを丁寧に行うことができたことが挙げられる。また、幼稚園としては、活動をつくることに教師がどう関わるかを考えるようになった。幼、小で関わることにより、互いに子どもの姿から活動をつくっていくという共通認識ができたという意味でよい影響を与え合うことができたと考えられる。

## ⑤小中連携はどのようなものになっているのか？

→本年度より、本格的な連携研究に踏み出した。本年度は、連携研究を行っている他校園の実践を調査したり、幼小中の授業を参観し合ったりした。研究発表会当日も、ほとんどの中学校教員が参観し、相互理解を深めた。

#### <講師中村先生講評>

##### ・ 幼小の活動形態の違い

幼稚園には休み時間がない。一日を通して見とりを行い、その姿から次の日の保育を考えるという繰り返しである。それに対し、小学校は、45分間の授業で休み時間がある。ある一つのサイクルの中で活動を行っている。この点に大きな違いがあると言えよう。

##### ・ 竹早幼・小のカリキュラム上の統一性

竹早小学校では、学習指導要領に基づいた教育は行っているが、教科の枠組みがない。学級経営案を見ればわかるように、子どもの姿から活動を考えていく。また、この学級経営案は、子どもの姿に応じて、ある程度修正されている。この意味で、竹早幼・小では、カリキュラム上の統一性が見られるのである。

保育を見る上で、教育観や施設、ねらいや子どもの学ぶ姿、カリキュラムなどいくつかのポイントがある。一人の子どもが何を獲得していくか、仲間たちの中でどうなっていくか等を含めて見た時に小学校の先生が取り入れるべきものがある。

##### ・ 事実と解釈

「この子は楽しくやっている」「熱心に取り組んでいる」というのは解釈である。子どもを見るのに、解釈をしながら見ない。まず、事実を見つめているのである。(誰と一緒にいたのか、どのにいたのか、何をしていたのか、何分間取り組んでいたのか、そこへ行って教師は何と言ったのか、その子が何と答えたのか等) そういった事実の積み重ねの中で解釈が生まれる。そして、この解釈は、自分の背景、興味、関心によってなされるものであろう。

## 4 今後の課題と成果

### (1) 成果

#### ① 研究提案に関して

子どもの主体性を引き出す環境構成を考える上で、活動の動機、経過、結果の3つのプロセスをふまえた記録を常にフィードバックしていくことが大切であることがわかった。また、抽出児記録を継続的にとったことで、子どもの変容をとらえて指導に生かす習慣が定着した。

#### ② 幼小連携に関して

園児と1年生との交流活動を行ったことで、子どもの個々の姿から、幼小連携のあり方を考えていくことができた。子どもを肯定的に受け止め、子どもが主体的に関わる環境を作っていこうとする教師のスタンスは、竹早の幼小で共通であることが確認された。

### (2) 課題

#### ① 研究提案に関して

1年間にわたり、分科会メンバー各自が抽出児を中心とした記録を蓄積してきた。しかし、環境構成を評価する上で、より多くの実践事例から「事実」だけでなく、「見とり(解釈)」の妥当性をメンバーで確かめ合う時間を十分にとることができなかった。

#### ② 幼小連携に関して

幼小連携は、その接続部分である幼稚園年長と1年生担任が連携を図るだけでなく、幼稚園と小学校が組織的に連携を図っていく必要があると考えられる。(文責 井口 眞美)